未来館 news VOL.92

福島県男女共生センター広報誌
2025 winter

特集

「未来館フェスティバル2025」シンボルイベント　能條桃子さん講演会

能條桃子さん 講演会
「わたしたちが生きたい社会は、わたしたちがつくる」

令和7年9月7日（日）に開催いたしました未来館フェスティバルでは、シンボルイベントとして能條桃子さんの講演会を行いました。講演の内容を紹介します。

■この社会は誰がつくっているのだろう

皆さん、こんにちは。能條桃子と申します。

私は今、若い世代の政治参加を促進する「NO YOUTH NO JAPAN」という団体と、政治分野のジェンダー平等の実現を目指して、地方議会に立候補する20代・30代の女性やノンバイナリーの人たちを応援する「FIFTYS PROJECT」という2つの団体の代表をしています。

今、若い世代は、新聞も読まなければテレビも見ない。でも、社会に関心がないわけでもない。ですから、自分たちが使っているSNS上に政治や社会の話が出てくることが大事なんじゃないかと思って大学生の時に「NO YOUTH NO JAPAN」の活動を始めました。

もうひとつ、私の年代では男女不平等が完全にないかといわれたら、全然あります。就職活動をするときも、男子学生は「自分が将来何をしたいか」を考えて就職先を選ぶのに、女子学生は「将来、子どもができたときに仕事を続けられる職場を選ぼう」というような感じで、まだ子どもを持つかどうかもわからないのにそういうことを頭の隅に置きながら就職活動をしているし、いろんな選択が平等なわけではないなと思っています。

それを変えるには、やっぱり政治が大事なんじゃないか、それも地域から変えていくことが大事なんじゃないかと思って、地方議会に立候補する若い女性を応援する活動をしていて、それが「FIFTYS PROJECT」になります。

若者は政治に関心がないと言われることが多いですが、私自身はずっと関心がありました。それは何から始まったのかというと、当時、私の地元の平塚市では「青少年議会」といって、子どもを市議会に呼んで市長に直接質問するイベントを夏休みにやっていて、それに参加したことが政治と関わった最初のきっかけです。

当時、平塚市の市長は大蔵律子さんという女性の方で、私は母も祖母も叔母も専業主婦という家庭に育ち、自分の中で女性が働くというと、学校や幼稚園の先生とか、スーパーで働いている人はイメージとしてありました。それ以外の選択肢が思い浮かばなかったので、市長が女性だったことが衝撃で、それで覚えているんだと思います。

中学生のときに「この社会をつくっているのは誰なんだろう」ということを考えるようになりました。地元の公立の小中学校の仲のいい友達で生活保護を利用している家庭で育ってる子は塾に行けなかったし、経済的に厳しい家庭の子は、絶対に公立の高校に行かなければならないと、ランクを2つくらい下げて高校を受験していたし、今でいうヤングケアラーで、障害がある親の面倒を見ていた子は高校を選ぶときに、家から一番近いという理由で高校を選んでいました。私は、自分のやりたいことを応援してくれる家庭だったので勉強に集中できて、いわゆる「いい高校」といわれるような偏差値の高い高校に行けました。最初は「自分は勉強を頑張ってるからだ」と思っていたけれど、でも、それだけではないなとも思い、「この社会って誰がつくってるんだろうな」と考えるようになりました。

高校の友達は親が学費を払ってくれることが当たり前なので、奨学金の案内も高校で配られません。一方で、同じ年齢の子でも、お金がないから大学に行けない子たちだってたくさんいるし、自分の人生の中で大学に行くという選択を想定できない子たちもいて、どういう家庭に生まれるかがどういう人生を歩むのかをある程度決めてしまうんだなというのを高校生のときにすごく思っていました。

あとは、高校生が生きている世界ってかなり狭くて、家庭と学校の中だけで生きている子たちが多い中で、私の高校の友人でも自死してしまった友達がいました。「成績が良くないと人として価値がない」というメッセージを家庭からも学校からも受け取って、競争をあおる環境というのは、自分にどういう価値があるかを考えることをすごく難しくしてるなという感覚もあったし、親が子どもにどういう人生を歩ませたいと考えているかによって、子どもが精神的な豊かさを得ることを遠ざけている

※ノンバイナリー…自身の性自認、性表現に「男性」、「女性」の枠組みをあてはめようとしないセクシャリティのこと。

■大学に進学して気づいたこと

大学1年生の初めてみんなで食事をしたとき、30人くらいのクラスに女子が5人しかいなくて、最初は5テーブルのうち1テーブルが女子のテーブルみたいな感じで座ってたんですね。幹事をやってる男子に「女子はどのテーブルもいたほうがいいから分かれて」と、女子を分配されたんですよ。そのときはモヤモヤしたけど、何にも言えなくて、おとなしく従ったんですね。自分の父親の世代が言うなら「昔はそういう考えの人もいたのね」って思うだろうけど、同い年の18歳の子が言ったことにびっくりしました。

また、ある男子が「結婚する相手には専業主婦になってほしい」という話をしていて、「なぜなら、自分が慶応に入れたのは、専業主婦のお母さんが献身的に育ててくれたからだ」と力説していたんです。私たちの世代は家庭科と技術だって男女共修だし、名簿だって男女は関係なかったし、席だって男女で分けられた経験はしないで過ごしてきたはずなのに、それでも「結婚する相手には専業主婦になってほしい」って言えちゃうことの根深さを感じました。

大学の先生にも「女子学生は子育てしやすい会社に就職しなさいね」みたいなアドバイスをされることがあって、なんで女子学生にだけ子育てしやすい会社に就職することを勧めるんだろうと思いました。いまだに男性は外で働いて女性が家でケアを担うみたいなことを前提として社員を募集しようとしている姿勢はおかしいなと思うようになって、それでジェンダー平等に関心を持つようになりました。

また、これから人口も減っていき、小さくなっていく経済の中で、自分のことしか考えてなくて大丈夫なのかなと思うようになり、社会勉強と思ってやったのが選挙事務所でのボランティアでした。そこには世代をこえていろんなバックグラウンドの人が集まっていて本当に楽しかったんですね。

その活動をしているときに、若い人がたくさん住んでるところへ行ってもどうせ投票に行かないし、車を走らせられる時間は限られてるわけだから、どれだけ効率的に高齢者が多く住んでるエリアを回るかが重要ということを言われたんですね。

実際、街でチラシを配ったとき、もらってくれるのは高齢者ばっかりで若い人は無視していく。

私がさっき話した格差の問題って絶対に政治の話なのに、若い人たちが政治の場にいないと何も変わらないんじゃないかなという問題意識につながっていきました。

■デンマークに留学して学んだこと

そんなことを考えながら、大学3年が終わったタイミングで、大学を1年休学してデンマークに留学しました。

なんでデンマークなのかといったときに、デンマークは、多くの子たちが高校を卒業してからギャップイヤーを取っていて、自分は何をしたいかというのを考えてから、大学に入るという選択をするんですね。日本みたいに高校を卒業したらすぐ大学に入るみたいな文化ではないというのを知って、そういう国に行ってみたいというのがありました。

あとは「北欧型福祉国家」というのがひとつ大きなモデルとしてあって、税金は高いんですが、介護、大学、医療も無償だし、福祉が充実しているので貯金しなくていいし、民間の保険会社にお金を預けなくていいような国を見てみたいというのもありました。

また、選挙のボランティアをやってから、どうして若者の投票率が低いのかずっと考えていたんですが、デンマークは20代の投票率が8割を超えていて、義務でもないのにどうしてなのか知りたいと思ったことも理由のひとつです。

デンマークの場合は、各政党に青年部があっ

て、若い人たちだけで政党をつくっているんです。そこでは、自分たちで党首を決めて、政策も自分たちで考えてみたいなことをやっていて、留学中、この政党青年部の子たちと一緒に過ごしたりしていました。

留学して驚いたのが、まず、選挙がワクワクするイベントだったということです。学校でも、選挙のときはプロジェクターに開票速報を映して、みんなでごはんを食べながら選挙結果を見守るイベントを自主的に開いて、「どこに投票するの?」、「自分はここにしようと思ってる」という会話をしていました。若い候補者もいるので応援する人たちも若く、自分たちが選挙をつくっているという感覚を持っている人が多いなと思いました。

私が留学した2019年はデンマークで政権交代が起きたタイミングで、41歳のメッテ・フレデリクセンさんが首相になりました。驚いたのは、もし日本で41歳の女性が首相になったら、絶対に次の日の新聞の見出しに「女性首相誕生」と書かれて、「2児の母がどうやって子育てと両立したのか」、「夫はどういう人でどうやって妻を支えたのか」とか、そういうストーリーであふれるんじゃないかなと思います。実際、ただ淡々と政策についてだけ載っていて、一歩も二歩も先を行っているなと感じました。

留学しているときに自分が一番驚いたのが、同年代の若い子たちが当たり前のように「声を上げて動けば状況は変えられる」と思っていることでした。例えば、デンマークでは大学も学費が無償で国から月9万円の給付があるので、もちろん余裕があるわけではないですが、少なくても勉強に集中して暮らせます。でも、2019年は給付が減らされるかもしれないというタイミングで、大学生がストライキしたり、事務局を封鎖したりして、徹底的にこの値下げに抗議しているのを目にしました。

日本から来た私には、「9万円が8万5千円になっても、もらえるならありがたい」と思うところですが、「自分たちの権利が切り下げられていく、だから、持っている権利は守っていかなきゃいけない」という話をしていて、今、日本でも大学の学費が年々値上がりしていますが、「どうせ言ってもしょうがない」みたいな感覚が蔓延してしまっているのではないかと思います。

留学中にあったこととして、「この授業、眠かったよね」と友達同士で話をしていたときに、1人の子が紙とペン持ってきて、なんで面白くないのか、みんなが言ってることを書きだしたんですね。そして、「これを先生に持っていくけど、一緒に行く人いる?」っていったので、先生に怒られるんじゃないかと思いながらついていったんですが、先生は「ありがとう。どうしたらいいかな?」という話をして、次の授業から多少良くなったんですね。

「おかしい、嫌だな」って思ったことがあったときに、それを良くするにはどうしたらいいかという行動が当たり前のようにできるし、みんなそれが普通だと思っているので、そういう態度を育てることが民主主義の実践なのかなと思っています。

■活動を始めるに至った経緯

デンマークで学んだこととして、社会としてどんな子ども・若者を育てるかという設定の違いを感じたことがあります。暗算を私がやったら、デンマーク人の友達が、「さすが経済学部だね」とか、「どうして暗算できるの?」と言ってほめてくれたんです。デンマーク人の友達はみんな簡単な計算でも電卓を使っていて、暗算はしていなかったんです。

実際に小学校の算数の授業を見に行ったとき、小学校3年生くらいの授業で、ちょうど筆算の授業だったんですが、授業についていけてない子には、先生が最終的には電卓を渡していました。日本だったら、小学校2年生のときに頑張って覚えさせるんじゃないかなと思うんですよね。

確かに暗算はできませんでしたが、デンマークにある大きい9つの政党の違いは説明できるし、自分は次の選挙はここに投票しようと思っているとか、そういう話は第二言語の英語でも流ちょうに話せるんです。日本だと、暗算はできても政党の違いを説明できない人はたくさんいると思うんですけど、デンマークの場合はそうではなく、「義務教育が終了するまでに最低限ここまではできてなければいけない」みたいな設定基準の違いなのかなと思いました。つまり、日本は勤勉な労働者を育てるための教育をしていて、デンマークは民主主義の担い手を育てる教育をしているという、ただその違いでしかないんだろうなと思いました。

「NO YOUTH NO JAPAN」の取組は、2019年の7月に日本で参議院選挙があって、当時、私はデンマークにいて、友達に、「国民と政治家は鏡だから、いい政治家がいないって言ってるだけじゃだめだよ」って言われてアカウントを作ったのがきっかけです。やってる中で、高校のときに「意識高いね」とか「宗教入ったの?」って言ってきた友達が、「初めて投票行ってきたよ」って連絡してくれたり、「友達がこういうのを頑張ってるから見てあげて」みたいな感じでシェアしてくれたりして、自分が変わると周りの友達も変わっていくんだなと思ったので続けることにしました。

民主主義の中でできることって、選挙だけではないんですね。立候補するのもそうですけど、署名とか陳情とかパブリックコメントとか、デモに参加するとか、意見を発信するとかいろいろあって、投票しかできないという間違ったメッセージが伝わってしまっているというところも問題なのかなと思ったりしています。

ほかの国を見てみると、2023年時点で18歳から立候補できる国がOECD先進38カ国の中だと6割で、25歳にならないと立候補できない国って日本を含め5か国だけなんですね。それは憲法で立候補できる年齢が決まっていて、憲法を変えるのが大変だからということがありますが、日本は法律で決まっているだけなので、18歳から立候補できるようになればいいなと思っています。

ちなみに、選挙に立候補する年齢を下げるプロジェクトでいうと、国会議員へのロビー活動のほかに、公共訴訟もしています。これは、主権者である若者に完全な参政権が保障されてないのは違憲なのではないかという違憲訴訟をしているもので、私も原告の一人なんですが、10月に地裁の結果が出ます。訴訟によって立候補できる年齢を見直す必要があるという世論を喚起したいなと考えています。

■ジェンダー平等について

今、もう一つ取り組んでいるのが、「FIFTYS PROJECT」という活動になります。2021年のオリンピック・パラリンピックの組織委員会の会長をしていた森喜朗さんが、「女性が入る会議は時間がかかる」と発言してニュースになったのを覚えていらっしゃるかと思いますが、今の時代にこんな発言してしまう人が国際的なイベントのトップなんだと思って本当に驚いて、でも、こういう問題発言は、1週間後には忘れられてしまうので、友人たちと話してオンラインで署名を立ち上げたところ、1週間で15万筆集まって提出したということがありました。

そのときには、同年代だけではなくて、上の年代の方々も参加してくれて、男女不平等がおかしいと思っているのは私だけじゃなかったんだなと思ってすごく勇気づけられました。そこで、一過性で終わってしまうのではなく、団体として取り組んでいく必要があると思ったので、何から取り組めばいいのか政治についていろいろ調べるようになりました。

国会議員の女性比率が低いという話はいろんなところで出てくると思いますが、全国に3万人いる地方議員のうち、全体の56%を60代以上の男性が占めていて、20代・30代の女性は1%未満です。本来、地方議会というのは住民の代表であるのに、圧倒的に男性、それも年齢が高い人が多いので、代表制という意味ではすごく偏ってるなと思います。また、各年代別の女性議員比率を見てみると、80代から50代までは年代が若くなるほど女性議員の数が増えているのに、40代、30代、20代になると改善するどころか、むしろ悪くなっています。ということは、まずは20代・30代の女性議員の比率が50%にならないと、一生ずっと「女性議員の数が少ない」と言い続けなければいけないんだなと思うようになりました。

女性の場合はライフイベントがあって、「立候補したいんです」と言っても、「1人産んでからのほうがいいよ。お母さんのほうが選挙で人気が出るから」とか、「政治家になったら産むタイミング逃すから」、子どもがいたらいたで「まだ子どもが小さいのにかわいそう」というように結局、いろんな理由で「今じゃないほうがいい」とアドバイスされてしまうんですね。

それに、身内というところでも難しくて、夫が妻の立候補を嫌がったり、夫はよくても義理の親、自分の親のブロックもあったり、とにかく女性が20代・30代で政治家になろうと思ったときには止められることが多いです。それなら、止められる量より応援される量を増やさないと立候補しようと勇気を持って踏み出せないんだろうなと思って、今、

特集　「未来館フェスティバル2025」シンボルイベント

20代・30代の女性やノンバイナリーに立候補を呼びかけて支援するムーブメントをつくろうとしています。

意思決定の偏りによって優先順位が上がってこなかった問題はたくさんあるので、多様な政治家が議会に存在する意味は大きいのではないかと思っています。例えば地方議会という話でいうと、非正規公務員の給料の低さや、保育士、介護士の待遇や賃金格差、避妊、中絶の話など、いろんなところに問題がありますが、そういう問題は、誰も目をつけてこなかったから進んでいない側面もあるのかなと思っています。

例えば、「FIFTYS PROJECT」に所属している議員の人たちが取り組んでいる問題として、防災分野での生理用品の備蓄の話があります。東京23区であっても半数以上の自治体で昼用ナプキンのみで夜用がなかったりします。そういうのって用意する人たちに想像力がなくて気づいてなかったみたいな話なのかなと思うんですね。

行政が提供している健康診断でも、男女の両方が対象になるものは1年の有効期限なのに、女性の婦人科系の健診だけ3か月とか半年しか受けられる期間がない自治体もあり、それもやはり制度をつくったときに考えが及ばなかったという話なのかなと思います。

こんなふうに、意思決定の場でも、実際の運用の場でも、多様な人たちがいないことによって見落とされているものがいろいろありますが、逆にいうと、20代・30代の女性やノンバイナリーの人たちがこれから議会の中で増えていったら、そこで話される内容が変わっていきます。でも、候補者や議員は勝手に育っていくことはなくて、誰かの応援によって生まれていくので、「こういう人にいてほしいな」という人たちを増やしていけるように動いていくことが大事なのかなと思っています。

最後になりますが、今、SNS上では、地方議会が無駄だと思われている空気感がすごくあって、「仕事をしてない人たち」みたいな見方が共有されています。しかし、新しい目線を入れたり、監視や提案という意味でも地方議会は大事で、地方議会だからこそできることがたくさんあるし、また、地域のコーディネーターとしてコミュニティーをつくっていくためにもとても大事なんじゃないかなと思っています。私たちの活動が地方議会の意義を再定義するものになったらいいなと思っています。

能條桃子さん プロフィール

1998年生まれ。2019年、若者の投票率が80%を超えるデンマークに留学し、若い世代の政治参加を促進するNO YOUTH NO JAPANを設立。Instagramで選挙や政治、社会の発信活動（現在フォロワー約10万人）をはじめ、若者が声を届けその声が響く社会を目指して、アドボカシー活動、自治体・企業・シンクタンクとの協働などを展開中。

2022年、政治分野のジェンダーギャップ解消を目指し20代・30代の地方選挙への立候補を呼びかけ一緒に支援するムーブメントFIFTYS PROJECTを行う一般社団法人NewSceneを設立。慶應義塾大学院経済学研究科修士卒。

テレビ朝日 大下容子!ワイドスクランブル、TBSラジオSessionなど出演中。TIME誌の次世代の100人 #TIME100NEXT 2022選出。

センター図書室のおすすめ本《能條桃子さん関連本》

1 『NO YOUTH NO JAPAN vol.1』

NO YOUTH NO JAPAN（黒住奈生 高槻祐圭 瀧澤千花 能條桃子）/編著　よはく舎　小林えみ　2020年

若者の投票率が80%を超える国、デンマーク。そこで若い世代の政治参加を目の当たりにした能條桃子さんは、若者参加型の民主主義を発展させる団体「NO YOUTH NO JAPAN（NYNJ）」を発足します。日本社会の問題に文句を言って終わらせず、行動すれば必ず変化が起こる。30歳以下の投票から未来を作ろう!という力強いメッセージが込められた1冊です。

2 『POSSE［ポッセ］vol.51』

POSSE　2022年

能條さんが目指すのは若者が声を届け、その声が響く社会。この本では、資本主義に代わる、より公正なシステムを求める若者の「ジェネレーション・レフト」という政治勢力に注目。日本の若者による社会運動の〈いま〉と〈これから〉について議論します。

問い合わせ　福島県男女共生センター図書室　☎0243-23-8308
開館時間　9時～20時（休館日前日は17時まで）

未来館フェスティバル2025
県民参加企画出展団体 & イベント企画

未来館フェスティバル2025では28団体の皆様にご参加いただきました。
皆様の活動・発表の様子を写真で紹介します。

1 森のクラフトづくり

NPO法人福島県もりの案内人の会

2 人権啓発 PR

福島人権擁護委員協議会二本松支部

3 『未来館 NEWS』イラスト作品展

イラストレーターico.

4 未来館スタンプラリー

福島県男女共生センター

5 知ろう!活かそう! 福祉用具

福祉機器展示室

6 福祉用具展示説明会

（一社）日本福祉用具供給協会福島県ブロック

7 あってはならない学校だが、なくてはならない学校「夜間中学」

福島自主夜間中学ネットワーク

8 外国人住民のための相談窓口

（公財）福島県国際交流協会

9 とも家事&キラっとさん

福島県共生社会・女性活躍推進課

10 あなたのお金との付き合い方チェック(大人向け) 貯金箱を作ろう(子供向け)

福島県金融広報委員会

11 バルーンアート

新福島芸能倶楽部

12 フルール　ドゥ　レミ

フルール　ドゥ　レミ

13 女性への暴力をなくすために

認定NPO法人ウィメンズスペースふくしま

14 子どもの「安心・自信・自由」

福島県CAPグループ連絡会

15 苔工房8匹の猫

苔工房8匹の猫

16 「子ども」のち「学校」、時々「家族」 ～動画上映と懇談会～

class0-1

17 幸せのキクイモスイーツ販売会

喜多方高校生活部

18 OKGショップ

小名浜海星高校

19 お惣菜販売会

おさかなとおそうざい マルソー

20 本のお楽しみ袋

図書室

21 情報バリアフリーを体験しよう!

(一社)福島県聴覚障害者協会

22 地域で自分らしく生きる ～福島県の人口流入・流出の現状把握から～

福島県国際女性教育振興会

23 JICA海外協力隊パネル展 ～こんなところに福島県人～

二本松青年海外協力隊訓練所(JICA二本松)

24 ビーンズふくしまハンドメイド部 作品展示・販売

NPO法人 ビーンズふくしま

25 アルコールインクアート体験

monange♡モンアンジュ

26 ひまわりプロジェクトと共生社会

NPO法人シャローム

27 ポーセラーツワークショップ (for*clover)

for＊clover

28 二本松市婦連バザー

二本松市婦人団体連合会

29 体験しよう! 高齢者になるってどんなこと?

(社福)福島県社会福祉協議会

未来館フェスティバル 2025 事前交流会 未来館カフェ

令和7年8月23日(土)開催

福島県内で活動している団体等の情報交換と交流の場を提供する“未来館カフェ”。

今年は県民参加企画のフェスティバル出展者説明会を兼ねて事前交流会として開催し、19名の方が参加しました。

参加者の皆様は地元二本松のお菓子を食べながら日頃の活動や思いについてたっぷりと話をして、フェスティバル当日に向けて交流を深めました。

みんなのふくしま①　～福島県内の男女共同参画の取組紹介～

田村市
保健福祉部
社会福祉課

今回は、令和6年度に行われた、田村市保健福祉部社会福祉課の取組についてご紹介します。

ご紹介くださった方：田村市保健福祉部社会福祉課 主査 大越 貴子さん

令和6年度に実施した主な事業

①男女共同参画審議会の開催：年2回（8月、1月）
②市内健康づくりイベントへ出展し、ジェンダー平等に向けた啓蒙・啓発活動を実施

啓蒙・啓発活動の内容

〈イベント〉田村市いきいき健康づくりフォーラム 2024

■日時：令和6年10月27日（日）10：00～15：00
■内容：
- 男性の家事育児への参画を促進するため、家庭内での分担割合をパートナーと話し合うコミュニケーションツールとして 福島県が作成した「家事・育児シェアシート」、併せてノベルティグッズのミニタオル(300枚)を配付
- 世界視点で見た「ジェンダーギャップ指数」 日本順位（118位/146か国中）の周知
- ワーク・ライフ・バランス、男性育児参加啓発チラシ、福島県パートナーシップ制度導入チラシの配付 ほか

■寄せられた声：
- 自分たちの世代は、「夫が外でバリバリ仕事、妻が家庭」が一般的で常識だと思っていたが、今は共働き家庭も珍しくない。子ども世代では子育てしながら夫婦で働くのが普通になっている。じぃじ・ばぁば世代もそれを常識と思えるように、時代に合わせて考えを変えていかないと。（女性）
- 「名もなき家事」の可視化は面白い。改めて家事にはこんなに工程があって、ほんの一部しかやってないけれど、やった気分になっているのかもしれない。（男性）
- 家に帰ってじっくりやってみる。家事割合の数字を出してしまうと、喧嘩の火種になるやつかもしれないからちょっと怖い。（男性）
- チェック項目が多くて取り掛かるのが面倒臭い。けれど、それだけ家事タスクは多いということ。夫婦で話し合うきっかけになって良いかもしれない。（女性）
- 料理は妻に任せているが、自分では家事全般を担っている自負がある。家事分担は出来ていると思う(男性)
- もっと若い時にこういう流れになっていたらまた違っているかもしれないが、旦那はもう何十年も「家事は妻の仕事」という思考になっているので、今さらやってくれと言ってもやらないと思う。（女性）

担当者：大越貴子さんから皆様へ

SDGsのゴールの一つに「ジェンダー平等の実現」が掲げられています。私たちの働き方や暮らしの中に「ワーク・ライフ・バランス」の理解や男性の家事・育児参加は拡がりつつあるものの、事業を通して皆さんのご意見を伺うと社会制度や慣習のなかでは、まだまだ固定的な性別役割分担や無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）は根強く残っているなぁ、と感じます。また、意思決定層に占める女性の割合は極めて低い状況と言えます。誰もが自分の個性や意思、能力を十分に発揮できるよう、多様化する時代の流れに合わせた包摂的な取組を進めていきたいと考えています。

みんなのふくしま②　～福島県内の男女共同参画の取組紹介～

NPO法人 はーぐる

性や妊娠に関する相談、性教育出張講座を行っている「NPO法人はーぐる」の活動についてご紹介します。

ご紹介くださった方：NPO法人はーぐる　代表理事 小林 さやかさん

NPO法人はーぐるの活動

NPO法人はーぐるは、私が不妊治療中に、乳児遺棄の事件を見たことをきっかけにして、「このような事件をなくしたい」という想いから始まった団体です。現在、私たちは、全部で4つの活動をしています。

1つ目は「SNSでの性の相談窓口の運営」です。「性行為中にコンドームが破れてしまったけど、アフターピルを買うお金がありません」、「生理が遅れている。妊娠の可能性はどれくらいか」、「学生で妊娠してしまったけど誰にも相談できない」、「中絶をすることに決めたが怖くて仕方がない」など妊娠にまつわる相談が日々寄せられます。しかし、「寝た子を起こすな」という風潮がまだ強く、正しい性の知識を学ぶ機会は乏しいというのが現状です。その一方で、テレビや雑誌では性が商品化され、暴力的な性行為も気軽に動画で目にすることができ、画一的なジェンダーが押し付けられ、性のことで苦しんでいる人がたくさんいます。

この現状を打破するために、2つ目の活動である「出張包括的性教育講座」を始めました。学校全体での実施はたくさんの先生の許可がいるためハードルが高いので、クラス単位や部活単位などでも実施しています。また、地域の子育て支援センターやこども食堂、個人宅など、来るもの拒まずでどんな依頼にも対応しています。大人も性教育を学ばないまま育ってきているので、子どもを対象に伺う講座でも、「大人にとっても大きな学びとなりました」と言っていただいております。

3つ目は包括的性教育の普及活動です。性教育はまだまだ「いかがわしいもの」と思っている方が多いです。まずはたくさんの方の目に触れて、「性教育は人権教育である」ということを知っていただくべく、マルシェに参加したり、講演会を実施するなどして、性教育の必要性について感じてもらう機会をつくっています。

4つ目の活動は、性教育実践者同士の交流会の実施です。まだまだ少ない実践者同士で、情報交換をしたり、現状について話し合ったり相談したりする場を設けています。また、その中で新しい実践者の育成にも繋がっています。

私自身、性教育を学び始めてから、日々の生活のいたるところにその学びを活かす場面があり、とても生きやすくなりました。「包括的性教育」は人間関係を学ぶところから始まります。ぜひ、まずは大人が学び、自分に対しても相手に対しても「普通」に捉われず、生きることを楽しむ大人の姿を子どもたちに見せていきませんか?

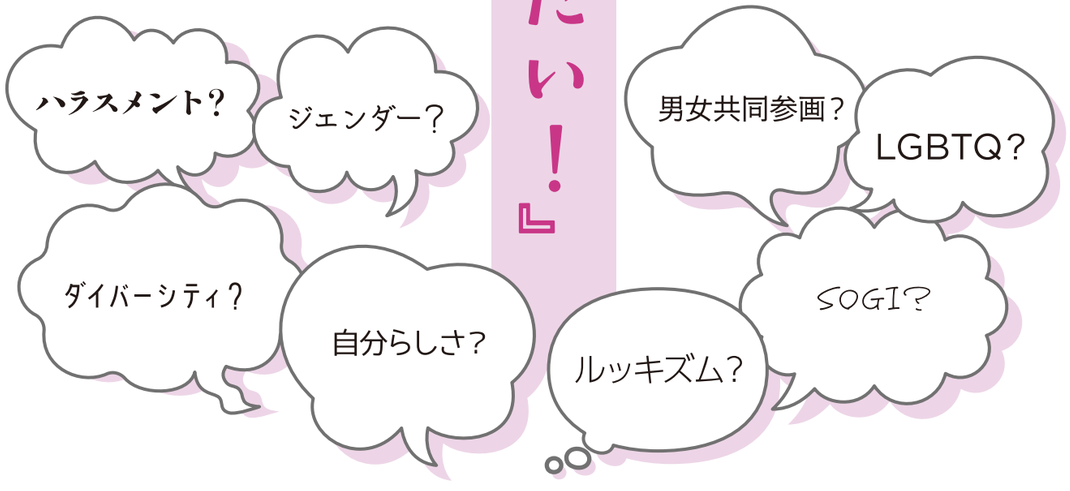
NPO法人はーぐる

福島市野田町 5−10−27
Tel：090-3955-6855　　Mail：hearggle@gmail.com
※電話での相談は受け付けておりません。
　また、非通知のお電話には対応しておりませんのでご了承ください。

NPO法人はーぐる
ホームページはこちら→

未来館 NEWS
リクエストコーナー

みなさまの『知りたい！』にお答えします



未来館NEWSでは、ご意見・ご感想、取り上げてほしいテーマをお寄せいただくためのアンケートを実施しています。

今回は、リクエストの中から「有害な男らしさ」について、福島大学教育推進機構 高等教育企画室准教授 前川直哉さんにお話を伺いました。

前川 直哉さん

Naoya Maekawa

福島大学教育推進機構高等教育企画室准教授。1977年生まれ。兵庫県尼崎市出身。99年東京大学教育学部卒業。2012年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（人間・環境学）。
灘中学校・高校教諭を経て14年に福島に転居し、一般社団法人「ふくしま学びのネットワーク」を設立して理事・事務局長に。
18年4月からは福島大学特任准教授、22年4月から現職。ジェンダー、社会学、教育学を研究。最近の共編著に『基礎ゼミジェンダースタディーズ』（世界思想社）。

―男らしさ、有害な男らしさとは―

「男らしさ、男性性」とは何か。実は定義が難しい言葉で、一般には「男性に期待されるパーソナリティ特性」と説明されることが多いです。

「男性は泣いてはいけない」、「感情を表に出してはいけない」。あるいは若干暴力的であることも「男らしさ」や「男性性」と言われることがあります。

例えば子どもの時におもちゃを乱暴に扱ったら、男の子と割り当てられる子の場合、「男の子はそれくらい元気があっていいよね」となりますが、女の子と割り当てられている子がそれをすると「女の子がそんな乱暴しちゃだめだよ」となります。男の子は暴力を奨励されて、女の子はそこから遠ざけられるというように、性別に応じて割り当てられるものが、男らしさ、女らしさ、男性性、女性性という訳です。

中でも、特に周りに害を与える、あるいは自分自身を傷つけてしまう、周りにも自分にもよくない影響を及ぼすものをToxic masculinity（トキシック マスキュリニティ）と呼びます。日本語訳はトキシックが「有害である、害を与える」、マスキュリニティが「男性性、男らしさ」ということで「有害な男らしさ」と呼ぶことが多いです。ただ、有害な男らしさと言った時にそれが何を指すのか、使っている人の文脈によるので、注意して使った方がいい言葉であると私は思います。

また、「有害ではない」男らしさが残ったとしても、「男らしさの規範に不適格、不十分だ」となった場合、結果的に誰かを傷つける形となってしまいます。

例えばスポーツ、野球やサッカーが得意というのも男らしさの中に入ると思うのですけれども、それは別に有害ではないわけですよね。でも、サッカーができない子にとっては、「男らしくない」というコンプレックスになるかもしれません。

私が「有害な男らしさ」という言葉をあまり使わないのは、このためです。男らしさの中から明らかに有害なものを取り除いたとしても、結果的に性別ごとの規範は残ってしまう。それよりも私は、規範そのものを弱めていく方向が良いと考えています。

―学校の中の男性性―

最近私は、学校自体が男性中心的に作られているのではないかという視点で、「学校の男性性」について考察しています。その一つが、暴力です。

例えば先生が怒鳴ったり、生徒をギロッとにらみつけたりするというのは、多くの学校で日常として残っていると思います。直接の身体的暴力、体罰でなくても、DVで言うところの精神的暴力とみなされているものが、学校で教員から生徒に対して行われているわけです。

この暴力は、学校内では「指導力」と呼ばれます。すると、ちゃんと怒る、必要な時に怒鳴る先生が良い先生、指導力のある先生だと、暴力が読み替えられてしまいます。

先ほど申し上げたとおり、男性の方が暴力的だというのは、ある程度多くの人が持っている共通認識としてあります。この暴力を指導力に置き換えることで、学校における男性中心構造、支配する構造がつくりあげられているのではないか。その支配は他の先生や生徒も認めていて、支配への合意を調達する仕組みがあることを『学校の「男性性」を問う』という本で書きました。

男性性というものが、学校の男性支配につながっている。学校という場は一見男女平等に見えますが、実際には全国的に見ても中学・高校の校長先生の8割以上は男性ですから、学校の中心が男性であるというのは厳然たる事実です。その背景に男性性の問題があるのではないかというのが、私の主張です。

女性の先生が「指導力をつける」と言った時に、男性の先生の真似をすること

が多くあります。こうなると、男性の先生の方が本家本元であり、より指導力があるとなってしまう。男性支配への合意が取り付けられているわけです。

学校における教師の盗撮という大事件が起きましたが、この背景にも学校の男性中心構造があったといえます。着替えを教室でさせることを何とも思っていなかったわけですから。

この点は、先ほど紹介した本に掲載したアンケートでも指摘されていました。体育の授業で、子どもたちの着替えを教室でさせている学校がまだまだ多い。デパートの試着室や公共のプールなどで、すりガラスの環境で着替えることはありません。学校でそれがまかり通るのは、一つは子どもの人権が十分に認められていないということ、もう一つは、男性を中心に考えていたということがあると思います。

―男性性研究が盛んな今、ジェンダーについて考える―

今、男性性研究はホットな話題の一つです。日本の男性学では、「そうは言っても男もつらいよね」という主張が目立っていた時期がありました。もちろんその視点も必要ですが、男性が持っている良くない部分を考えて、男女平等を進めようという考え方が欧米では中心です。

Critical Studies on Men and Masculinities（クリティカル スタディーズ オン メン アンド マスキュリニティーズ）略してCSMMと呼ばれます。意味は「男性と男性性に関する批判的な研究」。男らしさについて批判的に見ていこうということで、日本でも注目されています。

もちろん、男性であることが悪いことなのでは、決してありません。

「フェミニズム」というと男性を敵視している思想だと誤解されがちなのですが、そうではなく、男性が女性を支配する社会、構造的に男性が中心になりやすいという性差別を変えていこうというものです。

その中で例えば「男性は家事をしなくてよい、ケアをしなくてよい」といった社会的通念の結果、女性の負担が増すことをそのままにするのではなく、ちゃんと考え、改善していくということ。男性であることが責められているのではなくて、男女はなぜ非対称に置かれているのかを考えて、改善していくのがジェンダー研究です。

（次号に続きます。）

当センター図書室に所蔵しています！

BOOKS

『学校の「男性性」を問う』

大江未知/著　虎岩朋加/著　前川直哉/著　旬報社　2025年

問い合わせ　福島県男女共生センター図書室　☎0243-23-8308　開館時間　9時～20時（休館日前日は17時）

研修室・宿泊施設のご案内

福島県男女共生センターはどなたでも気軽に利用できる施設です。

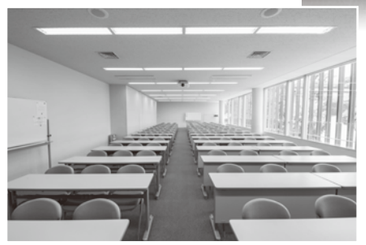
研修室や会議、各種教室、ご宿泊などにご利用ください。

センター外観

研修室

◆研修ホール（定員400名）
◆第1～第5研修室（10名～110名）
◆特別会議室、工作室、調理室、研修用和室（10名～20名）
使用料：1,000 円～14,600 円

研修ホール



第2研修室

調理室

宿泊室

お一人様1泊 4,400 円（税込）
洋室 定員2名
和室 定員4名
※シングルユース使用可能です

洋室

和室

施設のご予約はコチラ→

予約受付
0243-23-8301

Quiz ふくしまジェンダークイズ

Q.「この数字はなぁに?」　1 全国平均 17.4%　2 福島県 11.2%

※広報誌内に答えがあります!

福島県からのお知らせ

Information from Fukushima

とも家事 ふくしま

県では、固定的な性別役割分担意識を解消するため、性別にかかわらず共に協力し合って家事に取り組む「とも家事」を推進しています。

この度、「とも家事」を広く県民に呼びかけるキャッチコピー、応募総数581作品の中から、最優秀賞・優秀賞・佳作を決定しました!

「とも家事」キャッチコピー 決定!

最優秀賞

共に想い、共にやる、とも家事
（郡山市在住　馬上貴弘さん）

優秀賞

ともに生きる。だから、とも家事。
（郡山市在住　渡部智子さん）

佳作

ふたりでやれば軽くなる　きょうから、とも家事。	（福島市在住	斉藤亜弓さん）
「とも家事」で　家族のじかん　増えました	（本宮市在住	ペンネーム きょっぴんさん）
「共に」が暮らしの合言葉	（福島市在住	阿部雪乃さん）
全員レギュラーわが家の家事選手	（郡山市在住	ペンネーム わいわいさんさん）
ともに、家事。ともに、笑顔。	（いわき市通勤	ペンネーム ふくうましまさん）
いっしょに暮らすってそういうこと	（福島市在住	ペンネーム たかめんぼーさん）

家事シェア研究家
三木智有さんからの総評

どの作品からも「家事を自分ごととして考える時代が来た」という変化を感じられ、「誰かが」ではなく「ともに」。その意識の転換へのきっかけを見事に示してくれました。

「とも家事」ポータルサイトはこちら↓

Quiz ふくしまジェンダークイズ

Q.「この数字はなぁに?」の答え

A.令和6年地方議会に占める女性議員の割合

割合は、緩やかに増加していますが、福島の場合、全国平均と比べて低いものとなっています。

	令和4年	令和5年	令和6年
全国平均	15.1%	15.6%	17.4%
福島県	9.0%	9.2%	11.2%

（女性の政策・方針決定参画状況調べ：内閣府）
（地方公共団体における男女共同参画社会の形成又は女性に関する施策の推進状況調査：福島県）

アンケートにご協力ください。

広報誌「未来館NEWS」では、よりよい紙面づくりに向けアンケートを実施しています。ご意見、ご感想、取り上げてほしいテーマなど、Googleフォームにて受け付けております。

アンケートはこちらから→

センターの各種お知らせは、センターHP、SNSをご覧ください。

「あなたの視点がきっかけになる」
by ico.

表紙イラスト＆4コマ漫画作者

ico.（いこ）　イラストレーター
防災士（福島市防災士の会 会員）

PROFILE
1985年宮城県名取市生まれ、福島県福島市在住。
雑誌の挿絵や企業広告をメインに、自治体の観光PRのデザインやイラストも手掛ける。福島市防災士の会会員。防災啓発をイラストで伝える。

講演や問い合わせはHPへ
http://icollection.me/

◎表紙協力：
「就労支援A型事業所福島ケアサービス」

当センターに対するご意見・ご質問等がありましたら、下記までお問い合わせください。

未来館news VOL.92 2025 winter

（公財）福島県青少年育成・男女共生推進機構
福島県男女共生センター（女と男の未来館）
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
TEL：0243-23-8301（代）　FAX：0243-23-8312
https://www.f-miraikan.or.jp
X　Instagram